



【特集①】

最後の急斜面を下った水無月神輿

100年以上も続く伝統

こんな急斜面を神輿を担いでおりてくるのか――。

水無月神社（弓木区）の神輿は、小高い弓木城跡の蔵に納められ、2年に一度里に担ぎおろす「神輿おろし」が地域の伝統となっている。しかし、高齢化と担ぎ手不足、そして、担ぎ手の安全を確保するため、今年、100年以上続いた神輿おろしに幕をおろすことが決まっていた。



①／神輿を担いで急斜面を下る ②／弓木城跡につながる普段は静かな竹林 ③／後方から神輿を引っ張る綱を取り付ける ④／滑らないように地下足袋を履き担ぎ手 ⑤／ほら貝の合図で進んでいく ⑥／斜面をはうように並び担ぎ手たち ⑦／一番の急斜面に向かう神輿 ⑧／神輿おろしを見守る地域の方々 ⑨／神輿おろし後の朝食は地域のソウルフード「うどん」



5月1日午前4時、弓木区内に集合の合図のほら貝が鳴り響く。しばらくすると、地下足袋を履いた担ぎ手たちが弓木城跡をめざし、かがり火に照らされた急斜面を登っていく。

頂上では、神輿を水平に保つ担ぎ棒をロープでくくりつける作業が行われていた。「最後やからしっかりな」と、年配の男性が慣れた手つきで後方から神輿を引っ張る綱を取り付け、出発の準備が整った。実行委員長の大槻喜宏さんが「今年で神輿おろしは最後になります。ケガのないように」と担ぎ手たちに声をかけると、出発を告げるほら貝が鳴り響き、6年ぶりの重みを肩に最後の神輿おろしが始まった。

多くの人に見守られて

「ヨーイサー」のかけ声とともに、担ぎ手たちは一歩ずつゆっくりに、ゆっくりに斜面に踏み出す。足元は朝方までの雨で滑りやすくなっていた。滑り落ちないように最前列の担ぎ手の足首を押さえる者、その者の足首や背中を支える

者が斜面をはうように並び、「気をつけろ」「段差がきついぞ」と声が飛び交う。30分ほどで木々のトンネルを抜けると、見守った担ぎ手の家族や地域の方々から大きな拍手がわき起こった。神輿おろしを終えた大槻さんは、「皆さんの力が一つになり無事に神輿をおろすことができた。感無量です」と安堵の表情を浮かべた。

神輿渡御は継続へ

担ぎおろされた神輿は、弓木城跡の蔵に納めるのではなく、ふもとにある旧消防車庫で保管されるという。

「これが最後の神輿おろしだと思わずと少し寂しい――」。ポツリともらした担ぎ手の一言が物語るように、惜しまれながら一つの伝統に幕をおろすこととなった。しかし、長年、神輿を担いできた者、最初で最後の神輿おろしを経験した若者、そして、担ぎ手の雄姿を見守った家族らの心にしっかりと刻まれた地域の伝統。この伝統は、来年以降の神輿渡御とともに、次世代に語り継がれるだろう。